

ピアノ演奏における音楽表現力の育成に関する一考察 ー基礎的な楽典学習の必要性和有効性についてー

津山 美紀

九州女子短期大学初等教育科、北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2009年5月29日受付、2009年7月6日受理)

要 旨

本学初等教育科の学生は、卒業後は教育者や保育者として、児童・生徒に音楽を通して表現する楽しさや大切さを教えていかなければならない重要な責務がある。しかし、ピアノの授業や試験における学生の演奏は、間違えずに弾くことだけで頭が一杯になり、楽曲の表情を感じ表現するゆとりが欠如しているように見受けられる。そこで、表現力豊かな演奏をするためには、演奏技術の向上に加えて、楽曲のイメージづくりのために基礎的な楽典の知識の習得も不可欠である。この研究は、以下の2点の内容で授業内に特別演習を行い、数種類のチェックシートを用いて、ピアノ演奏における音楽表現力および意識の変化について考察した。

(1) 楽典の特別演習を行い、音楽表現をするためには楽典の知識の習得が必要であることを認識させ、楽典学習の有効性を確認した。

(2) 学生同士で演奏の表現力についての相互評価を試行し、自分の演奏や他者の演奏を評価することにより、表現力と意識の変化の推移を確認した。

その結果、「ピアノ演奏と楽典の知識の融合性」と「音楽表現に対する学生の意識の向上」が見られたことにより、この特別演習は概ね有効であり、ピアノ演奏における音楽表現力の育成に繋がったと推察された。

I. はじめに

本学では、入学試験科目としてピアノ実技試験を受験生に課していないため、入学時における学生のレベルは様々であり、教育や保育の現場でピアノを活用できるレベルに到達するのは、なかなか困難である。そこで先行研究として、鍵盤楽器初心者を対象に基礎の段階からコード・ネームを取り入れた演習を行った結果、初心者への指導法としては、ある程度の効果が認められた(上谷・津山 2007)。また、短期間で学習効果をあげるには、学生の学習意欲の有無が関わってくると推察されるため、ピアノの授業に対する学習意欲について、「心理的要因」と「外的要因」に分類し、本学学生の学習意欲の調査を行った。その結果、新しい課題に挑戦する意欲や、他の人の力を借りずに、自分自身で考えて学習する意欲が低いことが解った(津山 2008)。これらの先行研究を受けて、基礎の段階からコード・ネームを取り入れ演習を行った結果、読譜が短期間で出来る様になり、多くの曲をこなすことができ

るようになった。また、学生自身も読譜力や学習意欲の向上に繋がってきたと授業内容に対する評価で述べている。しかし筆者は、器楽(ピアノ)の授業や試験における学生の演奏を聴くたびに、楽曲の表情を感じ表現するゆとりが欠如している学生が多いと感じている。学生がピアノ演奏を行う際、音楽表現が不十分である要因を次のように考える。①本学では、音楽関係のカリキュラムの中に「音楽理論」の教科を入れていないため、ピアノ演奏に必要な楽典は、一人約15分の短いレッスンの中(器楽の授業)に組み込み、習得させている。したがって、学生が楽典の知識をきちんと習得できているかどうか、確認ができていない。②特にピアノ学習初心者は、学んだ楽典の知識を自分の演奏に結びつけて学習できていないと思われる。③楽譜から音を拾い、間違えずに弾くことだけで頭が一杯になり、歌詞の把握や楽曲のイメージづくりを十分に考えるゆとりがないと思われる。④教員は、教育者や保育者として最低限必要なピアノの演奏技術を身につけさせることや曲数をこなすことに追われ、音楽表現が十分できていないと感じながら、授業を進めていると思われる。そこで、本研究では上記のような現状を踏まえ、音楽(器楽)Ⅰの授業の中で、楽典の特別演習と学生同士で演奏についての相互評価を試行し、「ピアノ演奏と楽典の知識の融合性」と「音楽表現力および意識の変化」について考察する。

Ⅱ. 本学における器楽の授業内容

◇九州女子短期大学 初等教育科 音楽関係のカリキュラム (表1)

(表1) 九州女子短期大学 初等教育科 音楽関係のカリキュラム

1 年次前期	1 年次後期	2 年次前期	2 年次後期
音楽(器楽)Ⅰ(必修)	音楽(器楽)Ⅱ(選択)	音楽(器楽)Ⅲ(選択)	音楽(器楽)Ⅳ(選択)
音楽(声楽)Ⅰ(必修)	保育内容(表現)(保育必修)	音楽(声楽)Ⅱ(選択)	

◇音楽(器楽)Ⅰの授業形態／1コマ90分の授業内で、学生5名の個人レッスンとグループレッスンの併用。担当者は9名(筆者を含む)。

◇音楽(器楽)Ⅰの使用テキスト／ピアノテキスト(全国大学音楽教育学会・九州地区大学音楽教育学会編)

◇授業内容と目的

器楽Ⅰ／ピアノの基礎教材を中心に、基礎的なピアノの演奏技術の習得を目的とする。

器楽Ⅱ／ピアノの基礎教材からの応用として、小学校共通教材・子どもの歌の弾き歌い・マーチを中心に、実践に必要な課題の習得を目的とする。

器楽Ⅲ／以下の3つのコースからの選択

①小学校共通教材や子どもの歌の弾き歌いおよび身体表現教材についての演習を行い、表現分野での応用へ繋げることを目的とする。

②器楽Ⅱが終了していないピアノ初心者の学生を中心に、子どもの歌のコードづけや簡易伴奏を取り入れた演習を行い、マーチや子どもの歌のレパートリー拡大を目的

とする。

- ③電子オルガンの基礎的な演奏技術の習得と色々なジャンルのレパートリー拡大を目的とする。

器楽Ⅳ／各自のニーズに合わせた柔軟な内容。具体的には就職試験への対応や、様々なジャンルから選曲し演習を行う。ピアノ演奏を楽しむことを目的とする。

Ⅲ. 研究の目的

- [1] ピアノ演奏をするために必要な「基礎的な楽典」の特別演習を行い、その特別演習の中で習得した楽典の知識を演奏に生かし、楽典の知識とピアノ演奏の融合的な表現力の育成を図る。
- [2] 自分自身や他者のピアノ演奏を評価することにより、「聴く」ことや「表現する」ことの大切さを認識させ、自分自身の演奏に反映できるようにする。

Ⅳ. 研究の方法

◆対象者／本学初等教育科学生 1年生15名(1クラス5名×3クラス)

(筆者が担当している学生)

◆研究期間／2008年4月～7月の前期期間。音楽(器楽)Ⅰの授業の中で行う。

- ・15回の授業の内、11回目までは個人指導を重点的に行い、12回目～14回目の3回を調査期間にあてる。ピアノ学習初心者や経験者や混在しているクラス編成のため、11回目までに、ピアノ演奏に必要な楽典の知識と技術を習得させた後、試験曲(課題曲)が弾けるようになって、下記の内容による調査および研究を行った。

◆調査内容

- (1) 楽典の習得状況について、3回目のテスト結果を13の演習項目別に分類して、結果分析を行う。(表3・4・5)
- (2) 楽典の特別演習を行った後、学生の意識の変化について毎回アンケートによる調査を行い、回収して結果分析を行う。調査項目は、次の3項目である。
 - ①特別演習で習った楽典の知識は、身についていると思いますか？
 - ②楽譜を読むことは、困難だと思いますか？
 - ③楽典は難しいと思いますか？
- (3) 自分自身の演奏と他者の演奏について、毎回クラス内で演奏したものを評価し合い、回収して結果分析を行う。なお、自分自身の演奏と他者の演奏に対しての評価項目は、下記の8項目である。(表5)

(表2) 演奏に対しての評価項目

評 価 項 目
①音符や休符の長さを正確に表現できていると思いますか？
②リズムによって、演奏できていると思いますか？
③拍子を感じながら、演奏できていると思いますか？
④楽曲にふさわしい速さで、演奏できていると思いますか？
⑤楽譜に書いてある強弱記号に気をつけて、演奏できていると思いますか？
⑥標題のイメージどおりの曲想で、演奏できていると思いますか？
⑦コードや和音の響きを聴きながら、演奏できていると思いますか？
⑧演奏スタイルは、良いと思いますか？

(4) 3回目の他者による演奏評価と3回目のテストによる楽典の習得率を、学生別に比較し、結果分析を行う。

(5) 特別演習の有効性について、3回目下記3点についてアンケートによる調査をし、回収して結果分析を行う。調査項目は、次の3項目である。

- ①お互いの演奏を評価し合う演習は、役に立ちましたか？
- ②特別演習で行った楽典の内容は、理解できましたか？
- ③ピアノ演奏や音楽表現に対する気持ちが、変化しましたか？

◆調査方法／小テストの採点による集計およびアンケート調査（回収率100％）

- ・楽典の習得状況の調査についての1、2回の小テストおよび3回目テストは、満点値を30点にして集計する。
- ・アンケートについての調査は、次の4段階で得点化（1～4点）する。
- ・非常に思う…4点　・思う…3点　・少し思う…2点　・思わない…1点
- ・特別演習の有効性については、「どのように気持ちが変化したのか」の具体的内容を記述したものを結果分析する。

◆特別演習の内容

[1] 基礎的な楽典の知識を習得させるために、ピアノテキストに掲載されている楽典、および楽曲を題材にして演習を行う。主に、①思い出のアルバム ②ありさんのおはなし ③山の音楽家の楽曲を題材にする。楽典の内容は、音楽的事項を7つ(楽譜のしくみ・音符と休符の長さ・リズム・拍子・音楽記号と用語・和音・演奏スタイル)に分類し、さらに13の演習項目に細分化した。なお、各回の特別演習を行った時間は、約40分間である。内容は、以下のとおりである。

- ・ 1 回目は、聴くことや歌うことなどソルフェージュを中心にした演習と小テスト行う。
(表 3) また、課題曲のイメージづくりのために、絵を描く。(図1)



(図1) 【課題曲のイメージづくり】
「山の音楽家」の絵

- ・ 2 回目は、ピアノテキストを参照しながら、筆記による演習と小テストを行う。(表 4)
- ・ 3 回目は、テストのみを行う。(表 5)

[2] ピアノテキストより、①思い出のアルバム ②ありさんのおはなし ③山の音楽家
上記3曲の中から、任意の曲を選び練習させる。その楽曲をクラス内で演奏し、学
生同士(5名)でお互いの演奏を評価し合い、自分自身の演奏も自己評価する。

(表3) 1回目の演習と小テストの内容

楽典の分類	演習項目	1回目の演習内容	小テストの内容
楽譜のしくみ	①五線譜	色々な位置のドを聴いて、中央のドの位置を確認する。(1点ハ音)	色々な音域のドを弾きます。中央のドに聴こえた番号に○をしてください。
	②音部記号と音名	音部記号の読み方と音名を覚える。	ト音記号とヘ音記号を書いてみましょう
	③調のしくみと種類	ハ長調・ヘ長調・ト長調の音階を聴く。主音と調号の関係を確認する。	3種類の音階を弾きます。何調の音階か答えてください。
	④臨時記号	臨時記号(シャープ、フラット、ナチュラル)の意味を確認する。①②③	臨時記号がついているメロディーを弾きます。シャープ、フラット、ナチュラルのどれがついているか答えてください。
音符と休符の長さ	⑤音符	音符の長さを、手拍子で表わす。①②③	メロディーを弾きます。聴こえた順に、音符を書いてみましょう。
	⑥休符	休符の長さを、手拍子で表わす。①②③	メロディーを弾きます。休符を書いてみましょう。
リズム	⑦リズム	メロディーの中で一番多く使われているリズムを手拍子で表わす。①②③	メロディーを弾きます。リズムを書いてみましょう。
拍子	⑧拍子	手拍子を取りながら、メロディーを歌う。 ①②③	メロディーを弾きます。何拍子か答えてください。
		手拍子と足拍子を組み合わせて、強拍・弱拍を意識する。	
音楽記号と用語	⑨速さを示す記号と用語	アンダンテ・モデラート・アレグレット・アレグロの速さの違いを確認する。	メロディーを弾きます。速さを答えてください。
		メトロノームに合わせて、M.M=126と92の速さで歩く。②③	
	⑩音の強弱を表す記号と用語	強弱の変化があったら、体を使って表現する。①③	弱く表わす強弱記号から順に答えてください。
	⑪奏法、曲想を示す記号と用語	装飾音符・スタッカート・レガートの奏法と意味を確認する。	どちらの曲が、なめらかに聴こえましたか？
和音(コード)	⑫コード・ネームのしくみ	C, F, G, D, Aのコードの音色を聴き分ける。	コードを弾きます。コード・ネームを答えてください。
演奏スタイル	⑬演奏スタイル	美しく正しい手の形・姿勢・いすの座り方・足の置き方を確認する。	音が美しく聴こえた方に○印をしてください。

- ①思い出のアルバム
②ありさんのおはなし
③山の音楽家

(表4) 2回目の演習と小テストの内容

楽典の分類	演習項目	2回目の演習内容	小テストの内容
楽譜のしくみ	①五線譜	加線（線と間）を読む練習。	色々な音域のドを弾きます。譜表にドを書いてください。
	②音部記号と音名	ト音記号・ヘ音記号を譜表に書く練習。ト音とヘ音の確認。	ト音記号とヘ音記号を譜表に書いてみましょう。ト音とヘ音も書きましょう。
	③調のしくみと種類	ハ長調・ヘ長調・ト長調の音階を、楽譜を見て、確認する。	3種類の音階を譜表に書きましょう。
	④臨時記号	シャープ、フラット、ナチュラルを付ける位置を確認する。①②	シャープ・フラット・ナチュラルを譜表に書きましょう。
音符と休符の長さ	⑤音符	音符の種類と長さの確認をする。①②③	長さが短い音符から、書きましょう。
	⑥休符	休符の種類と長さの確認をする。①②③	長さが短い休符から、書いてみましょう。
リズム	⑦リズム	楽曲の中で使われているリズムを確認する。①②③	楽曲の中で使われているリズムを書いてみましょう。
拍子	⑧拍子	拍子の意味と譜表に書く位置を確認する。 ①②③	拍子を譜表に書きましょう。
		弱起と強起の意味と拍の取り方を確認する。	
音楽記号と用語	⑨速さを示す記号と用語	色々な速度記号の種類を調べ、読み方・意味・速さを整理する	速度記号の遅い順から並べて、記号で書いてください。
	⑩音の強弱を表す記号と用語	楽曲の中で使われている強弱記号を確認する。	弱く表す強弱記号から、書いてみましょう。強弱を表す他の2種類の記号も書きましょう。
	⑪奏法、曲想を示す記号と用語	奏法や曲想を示す記号を確認する。	ピアノテキストの中で、奏法や曲想を示す記号を探して書きましょう。また、その意味も書きましょう。(12番・18番・25番・32番・39番)
和音(コード)	⑫コード・ネームのしくみ	長音階・短音階の上にできるコードとそのコード・ネームの確認をする。	コード・ネームに従って、譜表にコードを書き入れましょう。
演奏スタイル	⑬演奏スタイル	演奏のスタイル(外見)だけではなく、気持ち(内面)の重要性を考える。	どのような気持ちで演奏すると、表現力がアップすると思いますか？

①思い出のアルバム

②ありさんのおはなし

③山の音楽家

(表5) 3回目のテストの内容

	楽典の項目	テストの内容
①	五線譜	中央のド(1点ハ音)を書きましょう。(ト音記号・ヘ音記号)
②	音部記号と音名	ト音記号にト音、ヘ音記号にヘ音を書きましょう。
③	調のしくみと種類	ハ長調・ヘ長調・ト長調の主音と調号がある場合は記入しましょう。
④	臨時記号	次の音にシャープ・フラット・ナチュラルを正しくつけましょう。
⑤	音符	音符の名前と長さを書きましょう。
⑥	休符	休符の名前と長さを書きましょう。
⑦	リズム	「ぶんぶんぶん」のリズムを書きましょう。
⑧	拍子	次の曲の拍子は何拍子でしょうか? 譜表に記入してください。
⑨	速さを示す記号と用語	速度が速い順から番号を書きましょう。
⑩	音の強弱を表す記号と用語	強く表す強弱記号から順に番号を書きましょう。
⑪	奏法、曲想を示す記号と用語	奏法や曲想を示す記号や用語の意味を書きましょう。
⑫	コード・ネームのしくみ	次の和音に、コード・ネームを書きましょう。
⑬	演奏スタイル	ピアノを弾くとき、どのような点に気をつけて演奏していますか?

V. 結果と考察

(1) 楽典の演習項目別の習得率を検証して、楽典の習得状況を考察する。(表6)

(表6) 楽典の項目別の習得状況

単位: 習得率は%、平均値・満点値は点

	楽典の演習項目	習得率	平均値	満点値
①	五線譜	60%	1.2	2
②	音部記号と音名	56%	1.1	2
③	調のしくみと種類	20%	0.6	3
④	臨時記号	62%	1.8	3
⑤	音符	71%	2.8	4
⑥	休符	63%	2.5	4
⑦	リズム	33%	0.3	1
⑧	拍子	80%	0.8	1
⑨	速さを表す記号と用語	33%	0.3	1
⑩	音の強弱を表す記号と用語	53%	0.5	1
⑪	奏法、曲想を示す記号と用語	15%	0.4	3
⑫	コード・ネーム	46%	1.4	3
⑬	演奏スタイル	100%	2.0	2
	習得率および合計点	53.6%	16.1点	30点

楽典の習得率が約3割以下の低い項目は、「調のしくみと種類」「リズム」「速さを表す記号と用語」「奏法、曲想を示す記号と用語」の4つである。また、習得率が約5割の項目は、「音部記号と音名」「音の強弱を表す記号と用語」「コード・ネーム」の3つである。特に、音楽表現に必要な⑨⑩⑪の「音楽記号と用語」についての習得率が低いという結果をみると、音楽表現が不十分である大きな要因と考えられる。①②③の「楽譜のしくみ」や⑫の「コード・ネーム」についても習得率が低いため、楽譜を読む際の基礎知識が不足し、読譜が困難になると思われる。「リズム」については、「ぶんぶんぶん」の曲のリズムを記譜させる問題だったが、すでに弾き歌いを学習した後であり、よく知っている楽曲である。しかし、その楽曲のリズムを正確に記譜できなかった結果を考えると、感覚だけで弾いている学生が多く、リズムを認識していないと推察される。

(2) 学生の意識の変化を検証して、楽典についての特別演習の有効性を考察する。(表7)

(表7) 学生の意識の変化

単位：点(%)

質問項目	1回目	2回目	3回目
①特別演習で習った楽典の知識は、身についていると思いますか？	2.6(65.0%)	2.3(57.5%)	2.4(60.0%)
②楽譜を読むことは、困難だと思いますか？	2.4(60.0%)	2.4(60.0%)	2.2(55.0%)
③楽典は、難しいと思いますか？	2.6(65.0%)	2.9(72.5%)	2.6(65.0%)
平均値	2.5(64.0%)	2.5(63.7%)	2.4(60.5%)

「楽典の知識が身についているか」という意識の変化では、2回目の演習後の調査結果をみると、0.3ポイント下がっている。また、「楽典は難しいか」という意識の変化では、0.3ポイントが上がった結果をみると、2回目の楽典の特別演習および小テスト後に難しさを認識した学生が増えたと推察される。読譜は、3回目の特別演習後に苦手意識が若干ではあるが、軽減されている。しかし、わずか3回の特別演習の試行で、楽典の基礎知識の習得や容易く読譜ができるようになるのは困難である。したがって、後期の授業の際に、継続的な楽典の学習を行う必要がある。

(3) 自分自身および他者のピアノ演奏についての評価の推移を検証して、特別演習の有効性を考察する。(表8)

(表8) 自分自身および他者のピアノ演奏についての評価

単位：点

学生名	A		B		C		D		E	
評価分類	自分	他者	自分	他者	自分	他者	自分	他者	自分	他者
1回目	1.8	3.5	1.8	2.9	1.3	2.6	2.1	2.7	1.8	2.9
2回目	2.3	3.4	1.7	3.1	1.6	2.6	1.8	2.6	2.6	3.0
3回目	2.2	3.5	2.1	3.0	2.6	3.2	2.0	3.1	2.6	3.0
学生名	F		G		H		I		J	
評価分類	自分	他者	自分	他者	自分	他者	自分	他者	自分	他者
1回目	1.8	2.7	1.6	2.4	1.1	2.6	2.1	2.9	1.2	1.9
2回目	1.2	2.7	2.2	2.3	2.0	2.6	1.7	3.0	1.2	2.0
3回目	2.1	3.3	2.7	2.8	2.0	3.0	1.8	3.5	1.1	2.5

学生名	K		L		M		N		O	
評価分類	自分	他者	自分	他者	自分	他者	自分	他者	自分	他者
1回目	1.7	2.9	1.8	3.1	1.7	2.5	2.3	3.5	2.6	4.0
2回目	2.5	3.3	2.6	3.4	2.0	2.6	3.0	3.5	2.7	3.9
3回目	2.5	3.5	2.8	3.8	2.3	3.2	3.1	3.8	3.0	4.0

* 網掛けは、評価得点が前回より低くなっている箇所

ピアノ演奏の評価の推移が段階的に高くなっている者は、自分自身による評価では15名中9名、他者によるピアノ演奏の評価では10名である。一方、2回目のピアノ演奏の評価が低くなっている者は、自分自身・他者のどちらの評価も15名中4名ずつである。2回目に自分自身と他者のどちらも低い評価になった者は(学生名D) 1名だけであるため、評価する意識が高くなって評価点が下がったのではないかと推察される。お互いのピアノ演奏を評価し合うことによって緊張感が生まれ、自分自身の演奏のグレードアップにも繋がり、特別演習は有効だったと考えられる。

(4) 3回目の他者による演奏の評価と3回目のテストによる楽典の習得率を、学生別に比較することにより、楽典の教育の必要性を考察する。(表9)

(表9) 演奏の総合評価と楽典の習得率の比較 単位: %

学生名	A	B	C	D	E
演奏の評価	87.5%	75.0%	80.0%	77.5%	75.0%
楽典の習得率	63.3%	63.3%	13.3%	43.3%	50.0%
学生名	F	G	H	I	J
演奏の評価	82.5%	70.0%	75.0%	87.5%	62.5%
楽典の習得率	60.0%	63.3%	53.3%	83.3%	13.3%
学生名	K	L	M	N	O
演奏の評価	87.5%	95.0%	80.0%	95.0%	100%
楽典の習得率	60.0%	86.6%	23.3%	30.0%	96.6%

* 平均値 演奏の評価: 82.0% 楽典の習得率: 53.6%

* 網掛けは、ピアノ学習初心者

ピアノ学習初心者8名のうち、楽典の習得率が平均値以下の学生は6名である。また、他者による演奏の評価は、5名が平均値以下である。さらに、演奏と楽典の両方が平均値以下の学生は、15名中6名である。したがって、ピアノ学習初心者および演奏力が低い学生ほど、楽典の教育が必要であると推察される。

(5) 特別演習の授業内容における満足度を検証して特別演習の有効性を考察する。(表10)

(表10) 特別演習の有効性 単位: 点(%)

質 問 項 目	平 均 値
①お互いの演奏を評価し合う演習は、役に立ちましたか?	3.6(90.0%)
②特別演習で行った楽典の内容は、理解できましたか?	3.0(76.7%)
③ピアノ演奏や音楽表現に対する気持ちが、変化しましたか?	3.2(81.7%)
平 均	3.3(82.7%)

①のお互いの演奏を評価し合う演習については、平均値が3.6点という結果から、特別演習は有効だったと評価できる。次の②の楽典の演習についても、内容の理解度の平均値が3点という結果をみると、今回の特別演習は概ね有効だったと思われる。しかし、楽典の小テストの習得率が、5割程度(表6参照)だった結果をみると、楽典の知識が身につくためには繰り返し演習が必要であると推察する。③のピアノ演奏や音楽表現に対する気持ちの変化については、平均値が3.2点という結果から、特別演習は有効だったと評価できる。また気持ちの変化についての具体的な内容については、以下のとおり「ピアノ演奏と楽典の知識の融合性」と「音楽表現に対する気持ちの変化」の2通りの意見がみられ、特別演習の大きな目標は、達成されたと推測される。

ピアノ演奏と楽典の知識との融合性
<ul style="list-style-type: none">・今までは、拍子を感じることが分からなかったが、これからはなるべく感じて弾こうと思う。・強弱をつけることで、表情も伝わり方もすごく変わると実感した。・楽典の知識を得たので、弾く時の注意などが分かって、弾く楽しさが増した。
音楽表現に対する気持ちの変化
<ul style="list-style-type: none">・何回か練習するにつれて、どう表現すれば良いのか、どういう感じを持って演奏したら良いのかなどが分かり、音楽はすごく深いと思った。・間違えないことばかりに気を取られていたが、それよりも表現の仕方に気を付ける方が大切だと思うようになった。・気持ちを込めて、演奏をしないといけないと思った。・曲をイメージしながら弾くようになった。・音楽表現には、今まで知らなかったことが沢山あることを知った。・以前弾いていた時よりも、気持ちを込めて弾くようになった。・曲の雰囲気や歌詞の意味をよく考えるようになった。

VI. 結論と今後の課題

本学でのピアノのレッスンは、どの教員も概ね個人レッスンのシステムで行っていて、グループ内でお互いの演奏を聴いて評価し合うことは、あまりないと思われる。今回の特別演習では、教員の一方的なレッスンだけではなく、学生に目的意識を持たせ主体的に課題に取り組ませたことが、音楽表現力の育成において成果があがったと思われる。また、音楽の理論に関しては、単に頭で考える学習だけに止めず、音が実際にどのように聴こえるかを確認させて、音のイメージを掴ませることにポイントを置く演習を行った。その結果、表現豊かなピアノ演奏をするためには、自分の奏でた音を良く聴いて、さらに楽典の知識を生かすことが重要であると学生が理解したと思われる。しかしながら、保育者養成校においては、楽器の習得や読譜力には、かなりの個人差がある。学生の自主性を促進し、個々のレベルを踏まえた上での指導内容や方法を考えていかなければならないと思う。さらに今後の課題は、保育者を目指す学生が、音楽に対して苦手意識を持たずに、音楽や音と遊ぶことの楽しさを実感し、それを保育者になったときに、子どもたちに音楽の楽しさを与えられるようなピアノの授業計画を立てていかなければならないと思う。

参考文献

- 1) 上谷裕子・津山美紀「保育者養成課程における初心者の器楽基礎について」
全国大学音楽教育学会 研究紀要 第18号 2007年 pp.92-102
- 2) 津山美紀「器楽(ピアノ)の授業に対する、学生の学習意欲について」
九州女子大学紀要 第44巻3号 2008年 pp.83-98
- 3) 角藤智津子・古川哲也・松倉恵子・望月雅枝「保育者に必要な音楽的能力の養成」
全国大学音楽教育学会 研究紀要 第17号 2006年 pp31-40
- 4) 熊谷周子「音楽表現力を養うピアノ指導法に関する研究」
全国大学音楽教育学会 研究紀要 第7号 1996年 pp26-35
- 5) 泉谷千晶「保育者養成課程の音楽の視点と総合的な授業展開の試み」
青森明の星短期大学 研究紀要 第26号 2000年 pp1-20
- 6) 小林一夫著「楽譜の読み方」日東書院 2007年

Instilling of the music power of expression in the piano performance

—Concerning the necessity and the effectiveness of fundamental musical grammar learning—

Miki TSUYAMA

Kyushu Women's Junior College, Elementary Education Department
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

The students of this university's elementary education course as educators or nursery teachers after graduation have a grave responsibility to teach music that expresses pleasure and importance. However, the performance of the student in a piano class or during an examination, I feel, lack the ability to express the mood of the musical piece due to her head being full with thoughts of playing without making any mistakes. Therefore to present a performance that is full of the power of expression, as well as improving the performance technology, it is indispensable, in order to make the image of the musical piece, to acquire the knowledge of the musical grammar that is fundamental. This study conducted a special seminar as part of the piano class implementing the two points below, using several kinds of check sheets, I considered the music power of expression and the change in the conscious related to the piano performance.

- (1) I conducted a special seminar of the musical pieces, and let the students recognize that the acquisition of the knowledge of the musical grammar was necessary to music expression and confirmed the effectiveness of the musical grammar learning.
- (2) I had the students mutually evaluate themselves about the power of expression in the performances and by evaluating one's performance and the performances of others, I was able to confirm the power of expression and the change in the conscious.

As a result, with "a piano performance and fusion characteristics of the knowledge of the musical grammar" and "improvement of the consciousness of the student for the music expression" having been seen, this special seminar is almost effective and I venture that it led to upbringing of the music power of expression in the piano performance.

Keywords : piano / music expression / basic knowledge / musical grammar